

今村復興大臣による外国プレス向け講演

「東日本大震災からの復興」

(2017年2月22日17:30

於：フォーリン・プレスセンター)

1 序

復興大臣の今村雅弘です。

大臣に就任して約7か月が経ちました。この間、東日本大震災の被災地の首長や市民の皆様とお話しするとともに、復興の現状を見てきました。

震災直後から現在に至るまで160を超える国・地域や40を超える国際機関から様々な形で支援いただいていることに大変感謝しています。最近でも各国の支援により震災関連の芸術、スポーツ、料理等の様々なイベントが行われており、被災者を勇気づけています。

間もなく、東日本大震災から6年が経過します。

今日お伝えしたいことは3つです。

1つは、東日本大震災からの復興は着実に進んでいるということ。

2つ目に、食品輸入規制解除のお願い。

そして3つ目に、観光地としての東北地方のアピールです。

2 復興の着実な進捗と震災の教訓の共有

震災直後からの国を挙げての復興への取り組みや、被災地のみなさんや自治体の努力、そして外国からの多くの支援の成果により、復興は着実に進んでいます。

被災地の学校、病院、道路等のインフラはほぼ復旧しており、ピーク時に47万人いた避難者数は、今では13万人に減少しています。被災者用の住宅は、2万戸の高台移転、3万戸の災害公営住宅が、2019年3月までに、おおむね完成予定です。

津波被災地域である宮城と岩手の復興は、震災から10年、すなわち、2021年3月までに完成させることを目標としていますが、これからは生業の復興を更に進めていきます。私はこれまでも、被災地で元気に産業・生業の再生に取り組んでいる多くの方々にお会いしました。岩手県洋野町の「株式会社ひろの屋」は、北三陸産ウニを扱っていましたが、震災で大きな被害を受けました。今、同社は、事業を再開し、海外への販売も行っています。宮城県南三陸町では、被災後に商店の皆さんが「さんさん商店街」という仮設商店街を作って頑張っていました。この度、かさ上げ工事が終わり、来月には本設の商店街ができます。復興の象徴となるでしょう。

さらに、震災前には無かった、新たな経済発展も見られます。宮城県の大衡村では、トヨタ自動車東日本が、復興特区制度を利用して工場の設備投資を実施し、工場での1600名の従業員に加え、関連企業で2000名もの雇用が生まれるなど、東北地方の太平洋側が自動車産業の集積地になりつつあります。また、東北地方の港湾は、北極海航路へのアクセスが良く、同航路の利用拡大に伴い日本の物流拠点の1つになっていくでしょう。

被災地を訪れるたび、大きな災害だったんだということを思い知らされます。しかし日本は、自然災害を克服しながら生きてきた国です。日本は防災・減災・復興に関する知見を蓄積していますので、国際社会と共有していきたいと考えています。2年前には仙台で国連防災会議を開催しました。国連で「世界津波の日」を制定するイニシアティブをとったのも、日本の経験が各国の皆さんに理解され、各国の政策において防災・減災の優先度が高くなることを目指したものです。

3 福島復興

次に、皆さんの関心が高いと思われる福島の状況についてお話ししますが、まずは福島県の全体像に触れたいと思います。

お配りしたパンフレットもあとでお読みください。英語や中国語版や韓国語版もあります。

福島県の県面積は13,000km²以上、日本で3番目に大きな県であり、例えばカタールの国土よりも広いです。このうち、原発事故による避難指示が出ているのは5%のみです。残りの95%では通常の生活が行われています。

これらの95%の県内各地の空間放射線率は、世界の主要都市のものと比べても大差なく、むしろ低いところもあります。

また、福島第一原発から80km圏内の空間放射線量は、2011年11月と比べて約71%減少しています。

これまでも放射線量の減少と生活環境・インフラの整備に伴い、避難指示を解除してきましたが、特に放射線量の高い「帰還困難区域」以外のほとんどの地域においては、この春までに避難指示を解除することを目指しています。

残る帰還困難区域についても、今後、居住可能な「特定復興再生拠点」を整備することとしています。

このようにして、今は立ち入れない場所でも、除染と必要なインフラの整備を進め、ふるさとに帰りたい被災者の思いを実現していきたいと思えます。

さらに、福島第一原発の廃炉作業を着実に進めていくと共に、沿岸部には、「福島イノベーション・コースト構想」によって、革新的技術の研究開発拠点の設置を進めていきます。震災前にはなかった新しい産業が生まれることを期待しています。たとえば、既に「櫛葉遠隔技術開発センター」が櫛葉町で本格運用を開始しています。富岡町には「廃炉国際共同研究センター国際共同研究棟」が来月完成予定、南相馬市・浪江町にはロボット開発・実証拠点が整備されます。また、再生可能エネルギーの研究のため、浮体式洋上ウインドファームの実証研究が福島県沖で行われています。

4 食の安全

さて、ここからは私から、外国のみなさんに対するお願いです。

福島第一原発事故の影響で、日本産の農林水産物に輸入規制が課されました。その後、現在までに21か国が規制撤廃し、また、多くの国・地域が規制を大幅に緩和しました。

日本は科学的根拠により設定された世界で最も厳しいレベルの基準値に基づく放射性物質検査を行っており、この検査を通過した食品のみが市場に流通しています。当然ながら、輸出される食品も同じ検査を経ています。

日本の基準は、一般食品 1 k g あたり 1 0 0 ベクレル以上の放射性物質が含まれていれば、流通させてはならないというものです。これは、EU やアメリカ、国際的な標準と言えるコーデックス (CODEX) に比べて大変厳しい基準であり、世界で最も厳しいレベルと言えます。飲料水、牛乳、乳児用の食品については、もっと厳しい基準を使っています。

昨年、福島県産の米、野菜・果実、畜産物、栽培きのこ、海産物からは、基準値を超えたものは検出されませんでした。福島県においては、米はサンプル検査ではなく全ての米袋を検査しており、2 0 1 5 年、2 0 1 6 年ともに、基準値を超過したものはありません。福島県近海の家産物についても検査しており、2 0 1 5 年 4 月以降、基準値を超えるものはありません。

こうした食品検査については、IAEA や FAO といった国際機

関からも適切であるとの評価を得ています。

水について心配する声も聞かれますが、2011年下旬以降、福島第一原発周辺海域の海水の放射性セシウムの基準値は、WHO 飲料水水質ガイドラインである1リットルあたり10ベクレルより十分に低い状態が継続しており、IAEA も公衆の安全は確保されていると評価しています。

このように、国際的に非常に厳しい放射性物質検査を経て市場に流通する日本産の農林水産物の輸入を規制することは、非合理的であると理解いただけるでしょう。各国・地域の当局には、このような科学的・客観的事実を見ていただきたいと思います。

福島県は、日本の中でも古くから特においしい農産物の宝庫として定評があるところであり、米やモモ等、優れたものを産み出します。

そんな中、若い方々も福島農業の再生に取り組んでいます。

昨年9月、復興庁の支援も受けて、フード・ファンクラブ「チームふくしまプライド。」が発足しました。「チームふくしまプライド。」の会員になった消費者は、ウェブサイトから福島県産の果物、お米、日本酒、加工品などの商品を購入したり、農業ツアーに参加したり、Facebook を通じて農家と交

流することができます。

この「チームふくしまプライド。」には、多くの若手の農業経営者が参加して、様々な新しい試みをしています。

例えば、大きくて高い糖度の果物や、昨年の G7 伊勢志摩サミットの贈呈品にも選ばれたりんごジュースを生産している大野農園を経営する大野 栄峰^{よしたか}さんは、農業生産の傍ら農園ビアガーデンなどのフルーツとツーリズムを組み合わせた取組を行っているほか、農業のイメージを若い世代に親しみやすくし、次世代の農業従事者の育成にも貢献しています。また、震災後に「人と種を繋ぐ会津伝統野菜」を設立した長谷川純一さんは、江戸時代から400年間伝えられる在来種、固定種の会津伝統野菜を無農薬栽培しています。

このような福島の新しい農業を、外国の皆さんにも楽しんでいただきたいと思います。

5 東北訪問の促進

最後に、外国の方々に、ぜひ東北を訪問してほしいというお願いです。

東北は、四季を通じ、訪れた人々に多様な驚きと発見を提供してくれます。自然が好きな方にとっても、歴史が好きな方にとっても、グルメな方にとっても、それぞれの魅力に満ち

た地域です。

宮城県沖の松島は、260の島から成り、日本三景、日本で最も美しい景色の1つとされています。島々の向こうから上ってくる朝日や、月の輝く夜の海の美しさは、一生の思い出になるでしょう。岩手県の猊鼻溪では100mの断崖絶壁の間をボートで走ることもできますし、宮城県と山形県の境にある蔵王では樹氷も見られます。もちろん、桜も新緑も紅葉もきれいで、温泉もあり、一年を通じて美しい自然が楽しめます。江戸時代の俳人松尾芭蕉も、東北を旅してたくさんの優れた俳句を残しました。

こうした貴重な自然景観は、時には大きな脅威をもたらす地球の活動により、長い時間をかけて形成されてきました。

青森県、岩手県、宮城県にまたがる三陸地域や福島県の磐梯山は、科学的に貴重な地形・地質として日本ジオパークに認定されています。これらのジオパークでは、我々が生きているこの地球の変動の歴史や自然と地域文化のつながりを学べるほか、美しい自然を十分に堪能することができます。

また、東北地方には多くの歴史遺産があります。

岩手県の北部、御所野縄文公園では、4000～4500年前の縄文人の集落拠点を見ることができます。より近い時代の歴史に興味があれば、世界遺産にも登録されている岩手県の平泉で、11世紀から12世紀に栄えた貴族の仏教的死生観に触れることができます。江戸時代に興味があれば、福島県の大内宿で300年前の街並みを歩いたり、会津若松で19世紀後半の、明治維新に至る内戦の遺跡を訪れるのも興味深いと思います。また、東北にはいたるところで伝統的な集落と里山が広がっており「日本の原風景」に触れることもできるでしょう。

さらに、東北地方の沿岸部ではおいしい水産物が取れ、野菜や果物、山菜も豊かで、料理には独特のおいしさがあります。日本酒でも有名で、品評会で多くの賞を取っています。

ぜひ、もっと多くの外国の人たちに、このように様々な魅力のある東北地方を訪れていただきたいと思います。そして、これは被災地の復興を更に後押しするものです。東北の人々は、外国人のみなさんをお迎えすること、そして、支援していただいた皆さんに「ありがとう」と伝えることを楽しみにしています。訪問された際は、言語の壁を気にせずにあたたく歓迎されるでしょう。外国人の方々向けの案内やサービスも充実させてまいりましたので、安心してお越しくください。

2019年にはラグビー・ワールドカップが日本で開催され、岩手県釜石市も会場の1つとなっています。2020年には東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されます。これを「復興五輪」として、復興を成し遂げつつある被災地の姿を世界に発信するとともに、復興を後押しする絶好の機会と位置付けています。

オリンピック・パラリンピックに参加・観戦のために訪日されるアスリートやプレス関係者、要人や観光客の方々には、その機会に東北地方を訪問し、被災前よりもさらに強靱で豊かで魅力的になった、ビルド・バック・ベターと呼んでいます。そのような復興した姿を見ていただきたいと思います。

皆さんも良く御存じのオリンピック体操金メダリストの内村航平氏にも、「復興応援大使」として、イベントへの参加や広報媒体への出演を通じ、被災地の応援をしていただいています。

皆さんの報道を通じて、各国の皆さんが東北の食や魅力に触れたいと感じていただければ、今日の講演の目的は果たせたこととなります。

本日はご清聴ありがとうございました。（了）